

「民族学校」の日韓比較研究

——日本の「朝鮮学校」と韓国の「華僑学校」を中心に——

大谷大学 宋 基燦

1 目的

この報告の目的は、日本の「朝鮮学校」と韓国の「華僑学校」の現状とその教育のもつ意味を実証的に把握し、それを比較することによって、異質な民族集団に対する日本と、かつて日本の植民地だった韓国両国のナショナリズム言説と実践における連続性と差異を実証的に確認することを目的とする。

2 方法

学校現場ならび学校を中心としたコミュニティへの調査は、人類学的現場研究の手法が主に使用された。日本の朝鮮学校へのデータは、報告者の既存の研究(宋基燦、2013)で分析した大阪の朝鮮中級学校と初級学校への参与観察調査結果が主に使われた。韓国の華僑学校へのデータは、主に文献資料と韓国仁川市所在「チャイナタウン」と「華僑学校」コミュニティへの現地調査結果を使用した。ところが、調査対象である華僑学校における閉鎖性から、教育現場への具体的比較よりは、学校を取り巻く外的環境と両国におけるエスニック・マイノリティとして在日朝鮮人と在韓華僑の現状について、各々の「民族学校」を中心軸にし、比較を行った。

3 結果

分離主義的「民族教育」と国家的象徴の教育的「動員」、学校を中心としたコミュニティの性格と機能など、韓国の華僑学校は朝鮮学校と共通しているところが多く観察される。ところがホスト社会の「民族」概念の変容によって、韓国の華僑学校は朝鮮学校と完全に異なる「民族教育」を行っていた。

4 結論

韓国華僑学校を取り巻く韓国社会のナショナリズムと朝鮮学校への排除からは、ある種の連続性は認められる。ところが、植民地支配の記憶の有無という歴史的背景の差は、生徒のアイデンティティ構築における大きな差を生み出しているようである。

文献

宋基燦, 2013, 『「語られないもの」としての朝鮮学校——在日民族教育とアイデンティティ・ポリティクス』岩波書店.

王恩美, 2008, 『東アジア現代史のなかの韓国華僑——冷戦体制と「祖国」意識』三元社.